

独占資本主義の価格理論

松 石 勝 彦

現代経済学叢書

新 評 論 版

著者紹介

まつ いし かつ ひこ
松 石 勝 彦

1960年 一橋大学経済学部卒業
1968年 京都大学大学院経済学研究科博士課程修了
現 在 一橋大学経済学部助教授
専 攻 経済原論，経済変動論
論 文 多数（略）
現住所 東京都国立市中2-1 RC503

独占資本主義の価格理論

1972年11月10日 初版第1刷発行
1974年1月20日 初版第2刷発行
1976年1月15日 初版第3刷発行

著 者 松 石 勝 彦

発 行 者 二 瓶 一 郎

発 行 所 株式 会社 新 評 論

東京都新宿区西早稲田3-16 電話 東京(202) 7391番
(T 160) 振替 東京 113487番

落丁・乱丁本はお取替えます。

印刷 白鷺舎印刷工業(64)
製本 鬼 原 製 本 所

© 松石勝彦 1972年

(核印廃止)

3333-331016-3177

は し が き

物価上昇またはインフレーションは、国民生活の上に重々しうのしかかり、国民のささやかな夢や希望をブルドーザーのように無残にふみにじりつつある。先日発表された総理府の「国民生活に関する世論調査」によれば、物価上昇に対するなんらかの不安や不満を訴えている者が全体の八三%にも達し、あるリサーチ・センタールの調査によれば、田中新内閣に望む国民の声の第一位は物価対策であり、全体の四〇%をしめていた。物価上昇に対する国民の怨みの声は、全国津々浦々に満ち、国民の胸中に怒りとなってこみあげてきている。物価は惜しみなく奪う――これが庶民の実感である。しかも、このような物価上昇は、単にわが国にのみみられる現象ではなく、程度の差こそあれ、世界の主要な独占資本主義国に共通にみられる現象である。

本書の究極的課題は、まさにこのような物価上昇を独占資本主義との関連で分析することにある。第三編「独占価格と物価上昇の理論」は直接この課題を扱う。同編第八、九章は、物価上昇やインフレの根本的原因をなす独占価格を分析する。第八章は独占価格の価値的組成の面を分析する。これはマルクス経済学の立場からすれば余りにも当然のことでありながら、従来の研究は無視してきた。第九章は、独占価格の形成メカニズムとは市場生産価格形成メカニズムが部門内競争制限によって変質したものであることを明らかにする。この点は部門競争制限による参入阻止価格と独占価格論と決定的に異なり、従来の研究の盲点をついたものである。兩章相まって独占価格の全面的分析が完了する。つぎの第一〇章は、この独占価格が全般的な物価上昇を必ずひきおこさざるをえない事情を分析する。そのさい、決め手となるのは独占資本主義固有の資本蓄積機構の分析である。この点も従来の研究に欠如していたものである。同章最終節は生産性格差インフレ論の論理的欠陥、独占資本の弁護論的性格、俗

流経済学的本質を徹底的に批判する。最終章は独占価格とインフレーションの関連を分析する。第一に、第一〇章で分析した独占価格を基軸とした物価上昇を追認するために不換銀行券が過剰に投入され、追認的インフレが発生することを論証する。第二に、独占価格の維持のための操業度調整には限界があり、それがために独占資本は自分たちの政治的権力である国家を動かして、有効需要造出政策をとらせ、そのことがインフレを必然的にひき起こすことを明らかにする。このように、物価上昇またはインフレの根本的原因是に独占価格であり、その真犯人は独占資本そのものである。これが、第三編を通じて私がもっとも強調したい点である。

しかし、その独占価格は生産価格が競争の独占への転化によって変質、変身したものにほかならない。そこで、第三編に先立つ第二編は「生産価格の理論」を展開する。第三章は生産価格の価値的組成Ⅱ形成の分析を行ない、第四章は形成メカニズムを明らかにする。そこでの焦点は、部門間競争と部門内競争との関連、生産価格論と市場価値論との関連、生産価格形成メカニズムに定める市場価値論の位置づけをどう考えるのかにある。従来の研究はこの点を明確にしえなかった。私は自分の積極説を提示する。この点の解明は独占価格形成メカニズム解明のカギをなしている。総じて市場生産価格論は本書の中核をなし、独占価格、物価上昇をとく武器である。第五章は需給不一致のさいの市場価値規定——いわゆる「不明瞭な箇所」——を私なりに明確にしたものである。第六、七章は補論である。第六章は、宇野弘藏氏の生産価格・市場価値形成メカニズム論を詳細に検討して、それがいかに非論理的で誤っているかを明らかにする。第七章は、ポルトキヴィッチの転形問題の解法がいかに致命的欠陥を内包しているかを内在的に暴露し、同時に私の試案を提示する。

ところが、生産価格こそまさに価値の転化形態にほかならない。だから、第二編に先立つて第一編「価値と価格」をおく。第一章は価値論と価格論の関係を論じ、同時に私の価格理論の方法を提示する。第二章の前半では、簡単に労働価値説のアウトラインを跡づけ、後半ではこの価値の貨幣表現である価値価格をとり出し、以下の価格

分析の原点を確定する。この価値価格こそ、最初の価格であり、価値の現象形態である。だから、以後の生産価格、独占価格の分析は同一土俵上の変化の問題と考えればいいのである。

以上、本書の編別構成、章の順序を逆にたどったが、本書の特徴は、価値論から出発して、その次に生産価格論を大きく展開し、そのあと生産価格論をベースにして独占価格論をとぎ、最後にこの独占価格を基軸にして物価上昇、インフレまでを首尾一貫して、体系的にとく点にある。

資本主義経済の内在的な運動は必ず価格という形態をとって表われる。独占価格は独占資本主義経済の顔であり、華である。それは独占資本主義経済の集約的表現である。そういう意味では、『独占資本主義の価格理論』は一種の独占資本論であり、また独占価格は国家の経済への介入を必至にするから、一種の国家独占資本主義論でもなければならぬ。本書はそういう展望をもつものである。

私は理論的混血児である。まず、一橋大学教授種瀬茂先生に感謝しなければならない。先生は学部ゼミ以来今まで懇切にご指導下さった。先生の競争論という問題意識は私の脳裡に深くやきついていて。本書はまさに競争論の具体化である。さらに、京都大学教授大橋隆憲先生にも学恩を受けた。先生は原論と統計分析とを結びつけることの重要性を私に教えて下さった。その他、故吉村達次教授、阪和会、独占研究会のメンバー諸氏に御礼をのべたい。しかし、私がいとも感謝すべきは、本書で批判の対象にすえた先達である。私はこれらの先人の業績を批判的に摂取して、自説を形成したのである。読者は、私の批判が激しい余り、先人の研究を過小評価しないで欲しい。とくに第三編で批判の俎上にのせた見田石介、本間要一郎、北原勇、高須賀義博の諸氏は、独占理論分野で第一級の業績をあげておられる方々である。だからこそ、私は一切の私的、世俗的、政治的配慮、妥協を排し、真正面からぶつかっていったのである。本間氏、北原氏、高須賀氏とは独占研究会を通してたえず付合っていたいるし、特に高須賀氏とは私的に親しい。にもかかわらず、あえて純理論的に諸氏を批判した。先達の寛容をお願いし

たい。

一橋大学経済研究所助手平井規之氏と私のゼミナリストンである大学院生滝田和夫氏は、私の原稿を丹念に読んで、論理の誤りを指摘したり、貴重な意見をのべてくれた。それがため、本書はぜひ改善された。社会学部助手の徳江和雄氏は、第八章第二節を検討してくれた。経済学部助手幸坂美佐緒さんには骨の折れる仕事をやっていただいた。みなさんの助けがなければ、体力のない私が本書を完成することができなかったであろう。私は心からありがとうを言いたい。最後に、今日の困難な出版状況の下で、本書の出版を推進して下さった新評論の社長美作太郎氏および編集部二瓶一郎氏、また編集上いろいろ御世話になった藤田智隆氏、飯塚由紀子さんに心からの謝意を表したい。

本書は第七章を除き全部書き下ろしである。昨年一二月から書き始め、ついに本年九月二十九日、日中国交回復の日に書き上げた。この間、精神的にも肉体的にも理論的にも悪戦苦闘した。私は体が弱い上に、授業負担の重さ（最高時で六コマ、最低ノルマ）が加わり、何度もダウンした。それがため、とくに終わりの部分に論理の乱れが生じていないかと恐れる。読者の率直な批判を乞う。

一九七二年一〇月一三日

松 石 勝 彦

追記 『資本論』、『剰余価値学説史』からの引用ページは、マルクス・エンゲルス全集版、旧インスティテュート版の順に示した。それぞれ原書のページ数である。

目次

第一編 価値と価格

第一章 価格論と価値論（価格理論の方法）……………二三

一 価格理論にとつての価値論の意義および価格理論の方法……………二三

- 1 価値の展開としての諸価格（二三）
- 2 価値とメカニズム（四四）
- 3 価値の相互關連的展開としての諸価格（五五）

二 価格理論による価値論の回帰的証明……………一七

三 価値論の今日的、現代的意義……………一九

第二章 価値と価格……………三三

一 労働価値説……………三三

- 1 労働価値説論証の固有の困難（三三）
- 2 一商品と他商品の多角的交換關係の分析（四四）
- 3 二商品の交換關係の分析による価値実体の抽出（五五）

二 主観価値説Ⅱ効用価値説の検討……………三七

- 1 効用価値説Ⅱ主観価値説の主張（三七）
- 2 日常体験的効用価値説（四九）
- 3 主観Ⅱ効用価値説への疑問（五九）

三 社会的必要労働時間による価値の大きさの規定……………三三

- 1 社会的必要労働時間による価値の大きさの規定（三三）
- 2 社会的必要労働時間と市場価値論（四四）

四 価値の現象形態としての価格……………三六

- 1 本節の課題（三六）
- 2 価値形態論と価値実体論（三七）
- 3 価値形態分析の手がかり（三八）
- 4 單純な価値形態（三八）
- 5 展開された価値形態（四〇）
- 6 第二形態から第三形態への移

行 (四〇) 7 一般的価値形態 (四二) 8 貨幣形態 (四三)

五 価値価格の成立 四四

1 価値価格の成立 (四四) 2 価値価格と価格論 (四五) 3 価値価格と転形問題の欠陥 (四六)

第二編 生産価格の理論

第三章 生産価格の形成 五二

一 課題と方法 五三

二 費用価格、利潤および利潤率 五三

1 費用価格 (五三) 2 利潤 (五四) 3 利潤率 (五四) 4 『資本論』第三卷第一章と第二章の關係 (五五)

三 資本構成の相違による特殊利潤率の相違 五七

1 利潤率規定の三要因 (五七) 2 剰余価値率 (五八) 3 資本の有機的構成 (六〇) 4 資本の回転期間 (六一)

四 商品の価値とおりの販売の現実的根拠 六三

五 平均利潤率と生産価格の形成 六四

1 問題の所在と解決の突破口 (六五) 2 生産価格、平均利潤率形成 (六六) 3 総価値Ⅱ総生産価格、総剰余価値Ⅱ総利潤の總計一致の二命題 (六七) 4 生産価格と平均利潤率の絶対水準 (六八)

六 ベーームの批判への反批判 六八

第四章 生産価格形成のメカニズム 八四

一 問題の所在 八四

二 生産価格形成メカニズムの分析 八五

1 諸資本の部門間競争 (八五) 2 諸資本の部門間移動 (八六) 3 資本移動の具体的形態 (八七) 4 資本移動による需給關係の変化 (八八)

三 生産価格形成メカニズムにしめる市場価値論の意義および位置 九〇

四	市場価値の分析	三三
1	諸個別的価値の均等化としての市場価値規定(二六)	
3	部門内「三面的競争」による市場価値の形成メカニズム(二七)	
	値の特殊規定(一〇〇)	
5	社会的必要労働時間による価値規定と市場価値論(一〇一)	
五	部門間競争と部門内競争との関連(市場生産価格の成立)	一〇四
第五章	市場価格と市場価値	一〇六
一	問題の所在	一〇八
二	「不明瞭な箇所」の「技術説」的理解と「誤記説」の検討	一〇九
1	いわゆる「不明瞭な箇所」(一〇九)	
	2 「技術説」的理解の検討(一一〇)	
	3 「誤記説」の検討(一一一)	
三	需給不一致のさいの市場価値の特殊規定と「不明瞭な箇所」の明確化	一一六
1	市場価格の価値的分析(一二六)	
2	需給不一致の場合の市場価値の特殊規定(一二六)	
4	『資本論』第三卷第一〇章における市場価値の特殊規定の位置づけ(一二七)	
5	市場価格形成メカニズム(一二七)	
6	需要、供給と市場価値決定(一二七)	
四	社会的必要労働時間の第二の意味	一二五
第六章	宇野弘藏氏の生産価格・市場価値形成メカニズム論批判	一二九
一	「通俗的」生産価格形成メカニズム	一二九
二	生産価格形成メカニズムにおける市場価値論の位置づけ	一三〇
三	市場価値形成メカニズム	一三八
四	むすび	一四六
第七章	転形問題に関する一考察	一四八
一	問題の所在	一四八

二	ポルトキヴィツチの転形方法の欠陥	四九
---	------------------	----

1	ポルトキヴィツチの解法 (四四)	2	価値の生産価格への転形と部門分割 (五〇)	3	同時的 生産価格化の非現実性 (五五)	4	同時的 生産価格化と固定資本の存在 (五九)	5	同時 的 生産価格化と拡大再生産 (五九)	6	z 1 の仮定 (五九)	7	結論 (五九)
---	------------------	---	-----------------------	---	------------------------	---	---------------------------	---	-----------------------------	---	-----------------	---	---------

三	費用価格の生産価格化と総価値 総生産価格	五四
---	-------------------------	----

1	費用価格の生産価格化 (五四)	2	費用価格の生産価格化と総価値 総価格の命題 (五九)
---	-----------------	---	-------------------------------

四	金生産部門と平均利潤率形成	五九
---	---------------	----

第三編 独占価格と物価上昇の理論

第八章	独占価格の形成	一七
-----	---------	----

一	第三編および第八章の簡単な構図	一七
---	-----------------	----

1	第三編全体の構図 (一七)	2	本章の構図 (一六)
---	---------------	---	------------

二	独占の形成	一七
---	-------	----

1	競争からの独占形成の論理 (一六)	2	イギリス、アメリカにおける独占形成 (一七)	3	わが国の独占資本主義 (一七)
---	-------------------	---	------------------------	---	-----------------

三	独占価格の形成	一七
---	---------	----

1 独占価格の価値的分析 (一七)	2 独占・非独占価格の定式化とその価値的分析 (二六)
3 独占的結合組織とアウトサイダーが並存する部門での超過利潤 (二六)	4 独占価格の価値的分析と生産価格の重要性 (二六)
5 独占価格の価値的分析の意義 (二六)	6 独占利潤の源泉 (二六)

四	独占価格と生産価格	一六
---	-----------	----

——見田論文批判——

1	問題の所在 (一六)	2	見田氏の所説 (一六)	3	見田氏の特殊利潤率把握の誤り (一九)
4	見田氏の独占把握の誤り (一九)	5	見田氏の論理矛盾の根因 (二四)	6	見田氏の独占

利潤論の弱点 (一七) 7 独占価格と生産価格 (一七)

第九章

独占価格形成メカニズム

一 問題の所在

二 独占価格形成メカニズム

1 市場生産価格形成メカニズムと部門内競争 (一〇〇) 2 独占価格形成メカニズム (一〇五)
3 非独占価格形成メカニズム (一一〇) 4 買い手独占 (一〇九)

三 独占価格形成メカニズムと操業度調整

1 問題の所在 (一一三) 2 景気循環 (とくに不況期) と独占価格の下方硬直性 (一一三) 3
独占価格形成メカニズムと操業度調整 (一一六)

四 独占価格形成メカニズムと需要

五 参入阻止価格Ⅱ独占価格論の批判

1 参入阻止価格論の特徴 (一一三) 2 参入障壁論の中核をなす規模の経済の検討 (一一四) 3
その他の参入障壁の検討 (一一五) 4 参入阻止価格論における部門間資本移動のとりえ方の欠陥
(一一六) 5 参入阻止価格論の致命的欠陥Ⅱ部門内競争の無視 (一一九)

六 むすび

1 独占価格分析による生産価格の実在性の回帰的証明 (一二三) 2 独占価格の一般理論化は不可
能か (一二三)

第二〇章 独占価格と全般的物価上昇

一 問題の所在と限定

1 本章の課題 (一二九) 2 本章の展開 (節構成) (一三〇) 3 問題の限定 (一四一)

二 物価上昇の根本的原因Ⅱ独占価格

1 独占資本主義と物価上昇 (一四二) 2 物価上昇の根本的原因Ⅱ独占価格 (一四四) 3 諸イ
ンフレ説の難点 (一四五)

三 独占価格の矛盾 (物価水準を上げるし、また上げない)

1	問題の所在 (二四〇)	2	管理価格インフレ論の弱点 (二四〇)	3	矛盾の設定 (二四九)	4	
	矛盾解決の突破口 (二五〇)						
四	独占資本主義の資本蓄積機構						二五四
1	独占価格分析から蓄積機構の分析へ (二五四)	2	蓄積源泉としての独占利潤と非独占利潤 (二五五)				
3	独占資本主義の蓄積機構 (二五五)	4	独占資本の過剰蓄積と非独占資本の過少蓄積 (二五七)				
5	過剰蓄積、過剰能力の例証 (二五九)	6	信用による過剰蓄積、過少蓄積の加速化 (二六〇)				
五	一般的物価水準の上昇						二六六
1	独占資本主義の蓄積機構と物価水準の上昇 (二六〇)	2	独占価格の二重の役割 (二六〇)	3			
	非独占価格と物価上昇の三つのケース (二六九)	4	生産性上昇を考慮した場合 (二七〇)	5	非		
	独占価格上昇による利潤の奪回 (二七〇)	6	物価のせんの上昇 (二七〇)				
六	生産性格差インフレーション論批判						二七五
1	レイノルズの所説 (二七五)	2	高須賀説 (二七五)	3	論理の倒錯 (二七六)	4	系論としての
	独占資本弁護論 (二七九)	5	賃金高位平準化の循環論法 (二八〇)	6	生産性格差インフレ論のし		
	りぬけ (二八〇)	7	生産性格差インフレ論の本質 (二八三)	8	その証拠Ⅱ調整インフレ論 (二八五)		
第一章	独占価格とインフレーション						二八七
一	問題の所在						二八七
二	インフレへの貨幣論的接近と構造論的接近						二九〇
1	両接近方法の総合 (二九〇)	2	両接近方法の外観的対立 (二九二)				
三	追認的インフレーション						二九五
1	独占価格による物価上昇 (二九五)	2	貨幣の過剰投入による追認 (二九六)	3	インフレーション (二九六)		
四	有効需要造出政策とインフレーション						三〇三
1	操業度調整による独占価格維持の限界 (三〇三)	2	救世主Ⅱ国家の登場 (三〇五)	3	国家による有効需要造出政策 (三〇六)		
4	有効需要造出政策とインフレーション (三〇七)						
五	インフレーションの根本的原因						三一一

第一編 価値と価格

第一章 価格論と価値論（価格理論の方法）

一 価格理論についての価値論の意義および価格理論の方法

われわれは以下、マルクス経済学の立場に立って、価値価格から生産価格を経て独占価格、インフレ価格に至る価格体系を構築しようとするのであるが、これに先立って本章においては、ごく一般的にわれわれの価格論にとって価値論はいかなる意義を有するのか、われわれの価格理論の方法は一体いかなるものであるのか、価格理論の体系的展開は逆に価値論にとっていかなる意味を有するのか、そもそも価値論の今日的意義はどこにあるのか、などの諸問題を明らかにしておこう。

1 価値の展開としての諸価格

われわれの価格理論は、その基礎に価値論、しかも単に価値論ではなく労働価値説をもたねばならない。価格は価値をその基礎にして、それからの展開として導き出されねばならない。価格とは価値が特有の機構を通して転化したもの、価値の転化形態にはかならない。価値を根本にすえ、この価値がいかなるメカニズムでもって各種の価格（価値価格、生産価格、独占価格など）に生成するのかを明らかにするのが、すなわち価格理論である。もし価値をその基礎にもたないとすれば、価格は実体のない、幽霊みたいなものになり、正体不明となる。それでは、

価値は科学的に解明されたことにならず、価格理論は眞の理論としては成立しえない。このように、眞の価格理論にとっては、価値は扇の要の位置を占めているのである。価値こそ価格の中核であり、原点である。

もともとマルクス経済学に理解があると目されるジョン・ロビンソン夫人でさえ、価値論について「私はこの論考で価値論は実際の問題の争点には不必要であると論じた。……価値論は神秘化である⁽¹⁾」⁽¹⁾と言い、価値論不要論を唱える。しかし、価値に基づかないでいかにして種々の価格が解明できるのか？ そもそもおカネとは何かというきわめて簡単な質問にすら、その本質的部分（価値の最高の発展した姿であり、価値の化身であること）は答えられないであろう。おカネがとけないのなら、商品価値の貨幣表現である価格もとけないであろう。また、生産価格も価値を基礎にしないで、どうしてとけるのか。資本とは剰余価値をうむ価値であるが、価値なしにいかにか分の価値すなわち剰余価値が説明でき、資本概念そのものも説明できるのか。価値論ぬきでは、せいぜい生産価格とは費用価格＋平均利潤であり、資本とはストックであるということぐらいしか明らかにできないであろう。しかし、平均利潤とは、何がどういうメカニズムを通して均等化されたものであるかを言わないと、現象を現象として記述しただけで、その正体は不明である。われわれは、価値論を放棄するのでなく、価値論に基づいて、価格理論を構築しなければならぬ。はたして、ロビンソン夫人の言うように、「マルクス自身の議論にしたがえば、労働価値説は価格の理論を与えるのに失敗している⁽²⁾」⁽²⁾かどうか、以下の展開が明らかにしてくれるであろう。

2 価値とメカニズム

価値は価格の中核であるとはいえ、価値をいくら説いてみても、それ自体では価格論そのものにはけっしてならない。価値は価格の解明に絶対不可欠の基礎、前提だとしても、これの解明そのものが即価格の解明にならないのは当然である。つまり、価格の解明には価値の展開過程あるいは価値の転化過程の固有の分析が必要なのである。